

參考資料

主な計画目標の達成状況

緑の基本計画の中間年次である平成17年時点での、主な計画目標の達成状況は、以下のよう
にまとめられます。

- ・都市公園整備数は、目標に到達していないものの、面積についてほぼ中間目標に達しました。これは、身近な公園緑地の整備が進まなかったものの、大規模な都市公園の整備が行われたためと考えられます。
- ・1人当たりの都市公園面積についても、中間目標を達成しました。これは、都市公園面積の着実な確保と人口が伸び悩んだ結果と考えられます。
- ・市街化区域における緑地面積の割合は、大規模な都市公園の整備が進んだことから、中間目標を上回る結果となっています。
- ・街路樹総数は、微増となっていますが、その内訳をみると、高木本数が減少し、低木の本数が増加しています。

■主な計画目標の達成状況

	平成7年値		平成17年現在値	策定時の 中間年次目標値
都市公園の整備量	293ヶ所	⇒	335ヶ所	410ヶ所
	373.0 ha		651.0 ha	664.2 ha
1人当たりの都市公園面積	10.5 m ² /人	⇒	18.0 m ² /人	17.6 m ² /人
市街化区域に対する 緑地面積の割合の推移	6.6 %	⇒	7.3 %	約7 %
街路樹総本数	116,300 本	⇒	118,000 本	20年後2 倍化
市街化区域面積の推移(参考)	7,770 ha	⇒	7,958 ha	8,400 ha
人 口 (参考)	362.9 千人	⇒	361.4 千人	365.0 千人

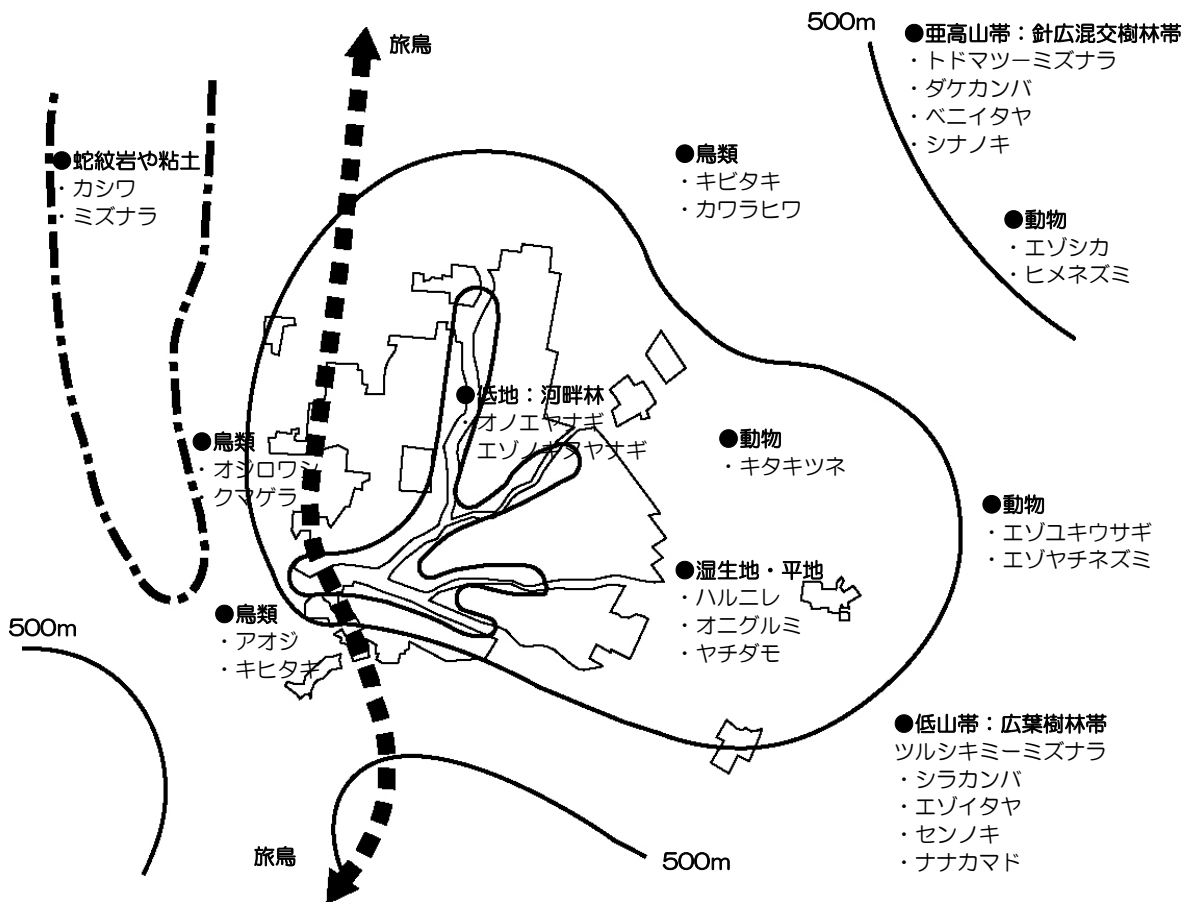
※個別の統計データを掲載しているため、計算結果が一致しない場合がある

(1) 動植物

旭川市は、豊富な河川や盆地を囲む変化のある丘陵低山地形の林帯に棲み分けられる多様な動植物相を持つまちです。ヤナギ等を主とする河畔林、ハルニシやヤチダモを主とする平地林、蛇紋岩や粘土の丘陵地ではカシワ二次林やアカエゾマツが見られ、500m以上の亜高山では針広混交樹林が広がっています。

また、市街地が動物移動を阻害しており、エゾシカの主な活動域が東側の丘陵地に偏る現象が見られます。

河川周辺では、さまざまな鳥類の生息が確認され、営巣が可能な河川改修など生物の生活環境の保全の在り方が模索されています。



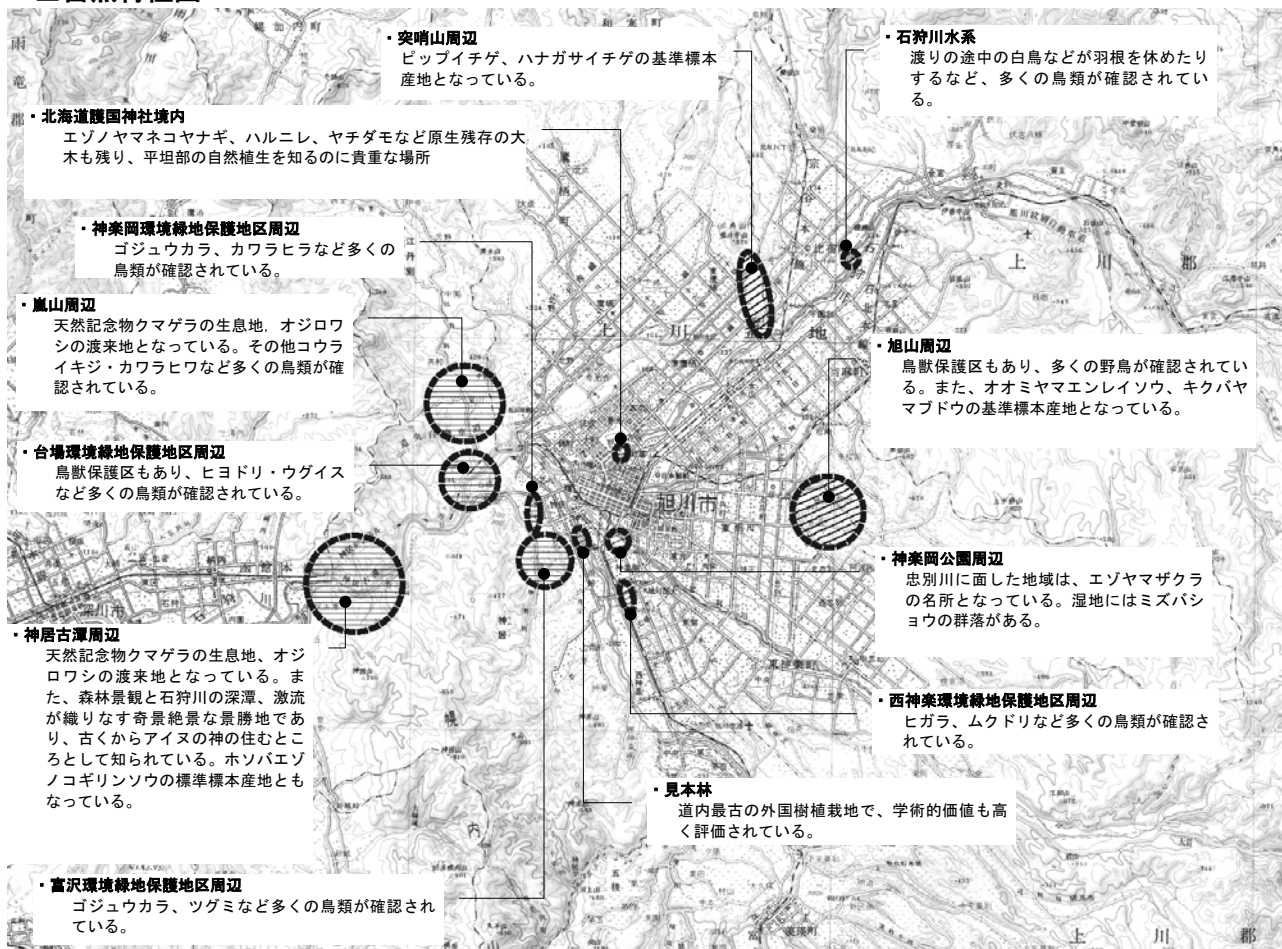
■ 動植物分布概念図

(2)土地自然特性

旭川市は、天然記念物、特殊鳥類に指定されているクマガラ、オジロワシ、クマタカ、オオタカ等の貴重な鳥類が確認されています。また、草本類のカタクリやフクジュソウなどは突哨山をはじめ嵐山公園や旭山公園などで普通に見られるほか、絶滅危惧種のベニバナヤマシヤクヤク、サルメンエビネや絶滅危急種のミヤウチソウなども確認されています。

さらに、神居古潭はホソバノエゾノコギリソウの基準標本産地になっているほか、奇景絶景は本道を代表する景勝地として知られているなど、自然環境の観点から多くの資質・資源を有しています。

■自然特性図



■都市計画区域内の森林面積

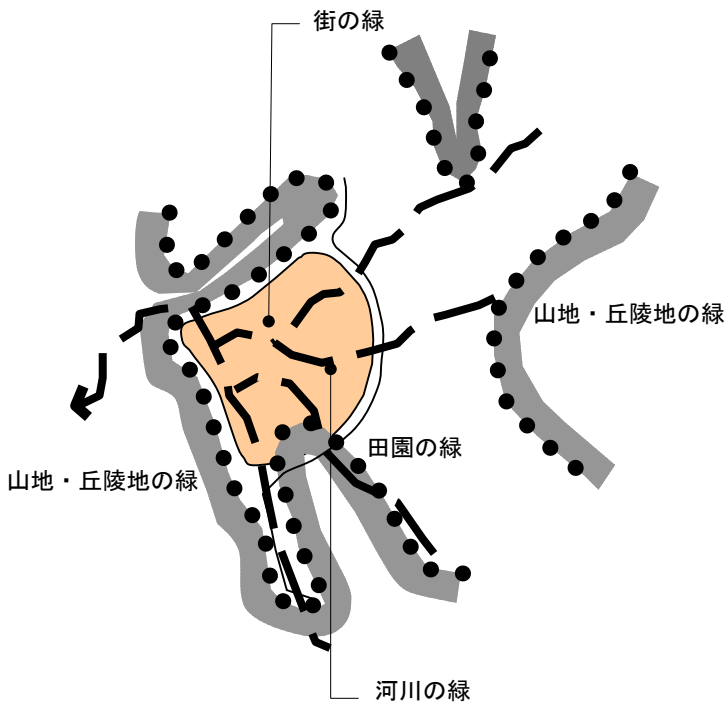
	人工林	天然林	その他	合計
国有林	2,158 ha	2,860 ha	215 ha	5,233 ha
民有林	661 ha	985 ha	26 ha	1,672 ha
合計	2,819 ha	3,845 ha	241 ha	6,905 ha





※その他は、天伐跡、人伐跡、未立木である。

(3)旭川市をとりまく緑

旭川市の緑を大きく捉えてみると、石狩川等の主要な河川による河川の緑、北部の東鷹栖の丘陵地帯、西部に春光台及び嵐山一帯の丘陵地域、南に延びて台場及び神居古潭から神居山地域、さらに最東部の米飯地域は大雪山へと連なる山地・丘陵地の緑、市街地周辺を包み込む田園の緑、そして市街地内にある公園や街路樹、社寺林による街の緑と4つの骨格的な緑に分けることができます。

■旭川の緑のフレーム



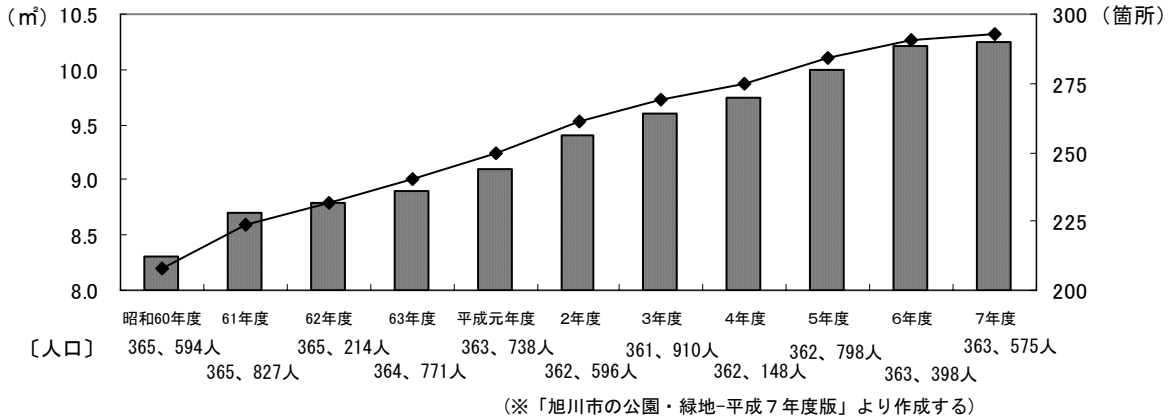
河川のみどり 	旭川市の水と緑、そして景観の骨格。市内には石狩川、牛朱別川、美瑛川、忠別川など大小約130本もの川が流れており、そこには約730もの橋がかけられている。
山地・丘陵地のみどり 	神居台場、旭岡・春光台神楽丘陵等の広葉樹の樹林地が、市街地景観の背景となり、旭川の特徴的なみどりの1つと言える。 市街地を取り囲む江丹別・米飯・神居山等の山塊は、まちの領域を形成する緑地として重要な緑である。
田園のみどり 	本来の生産的機能に加えて、郷土景観を代表する生産緑地である。
街のみどり 	市街地内に分布する社寺境内の樹林、学校林、外国樹種見本林等は、市民生活に身近で貴重なみどりである。

(4)公園の緑

①旭川市の公園整備の状況

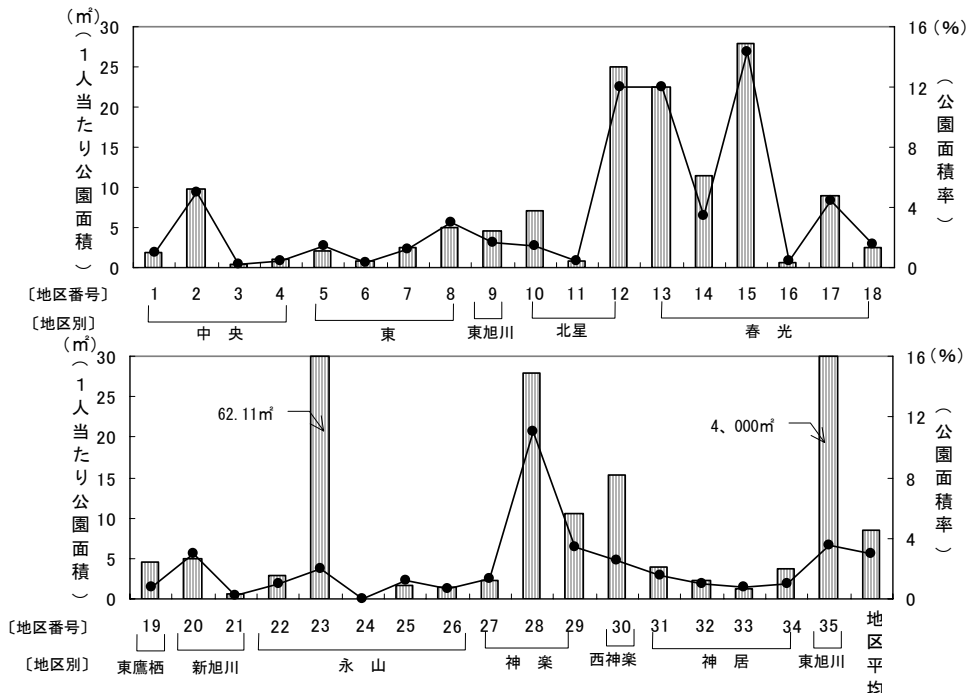
旭川市の公園は、平成8年(1996年)3月現在、293箇所、372.99haとなっており、1人当たり公園緑地面積は10.3㎡/人となっています。最近10年間の市内の公園の推移を見ると、箇所数で約1.4倍、市民1人当たりの公園面積で1.3倍と大きく増加しています。

■都市公園数の推移

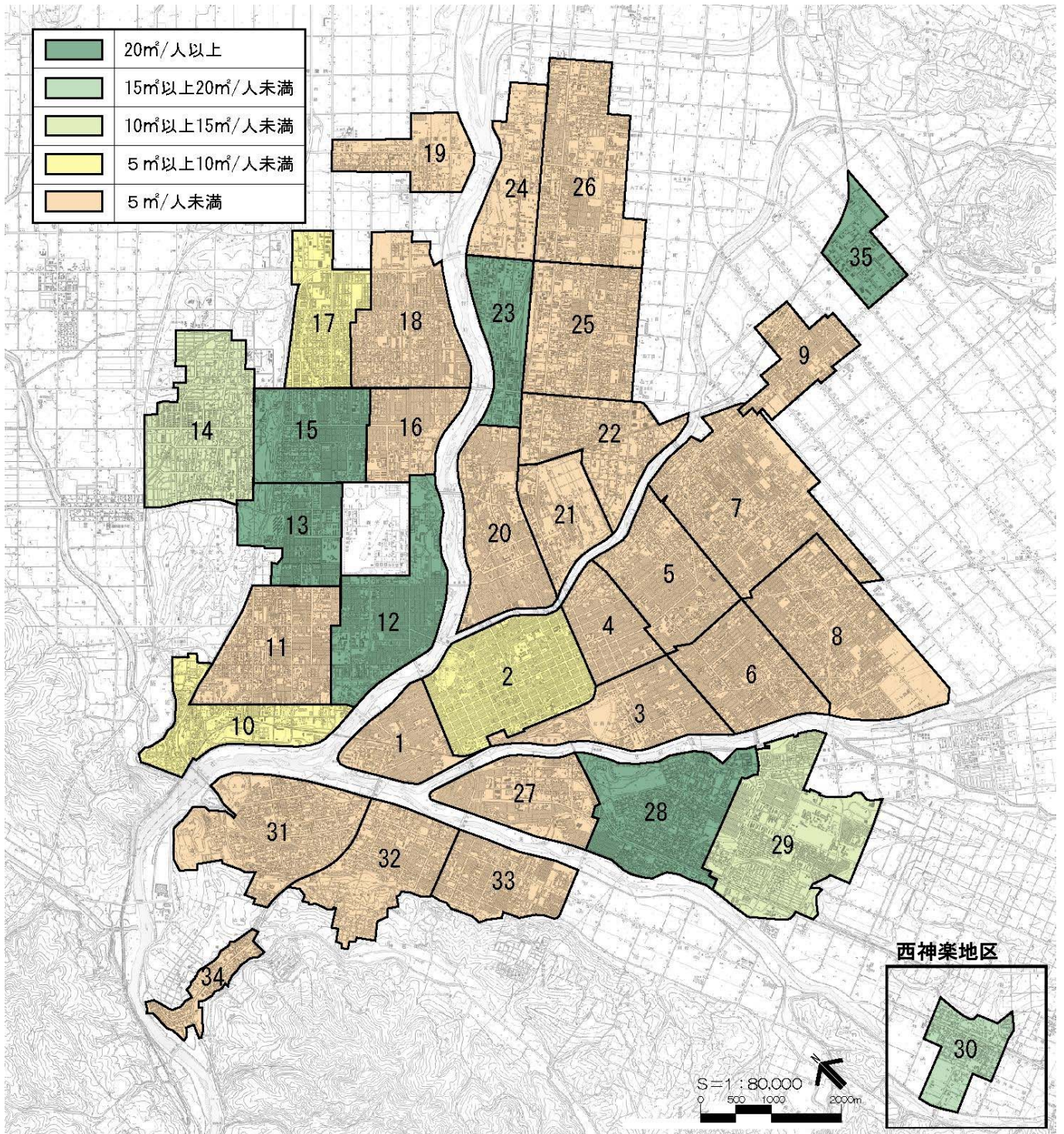


地区別の一人当たりの都市公園面積を見ると、大規模公園のある春光地区や神楽地区が高い整備水準となっているのに反して、東鷹栖、神居、永山、東旭川地区で低い値を示しています。また、公園整備の充足度を誘致圏として見てみると、市街地外郭となっている比較的后発地域は、充足率が高いものの、旧市街地及び現在の中心市街地は公園空白地が多く残されています。

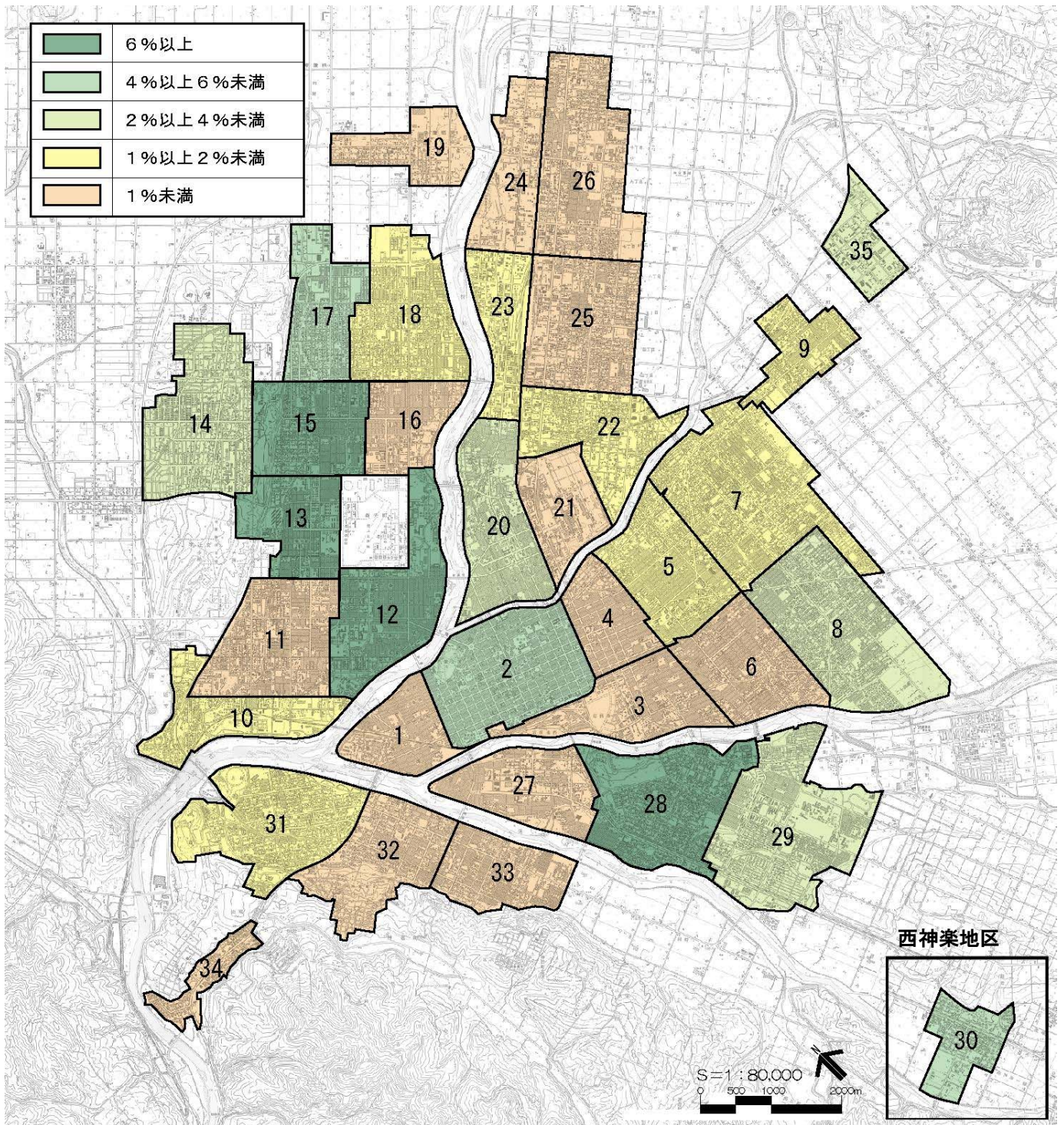
■地区別の一人当たりの公園緑地面積と公園面積率



■一人当たりの公園緑地面積の地区別分布図



■公園緑地面積率の地区別分布図



②道内主要都市と公園整備の比較

旭川の公園整備の状況を道内他都市と比較すると、人口1,000人当たり都市公園の箇所数、1ヶ所当たり公園面積、公園面積率など比較都市全体の平均値を下回る結果となっています。

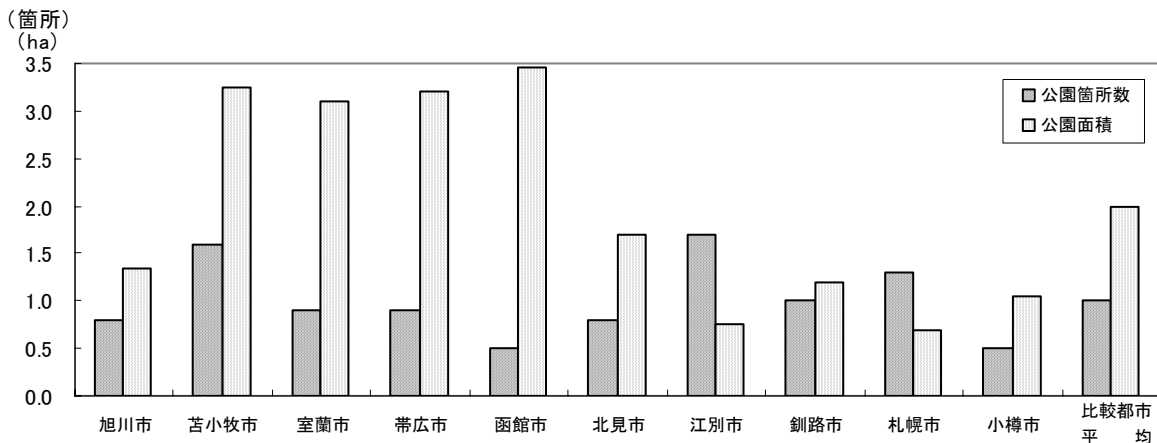
■道内主要都市の都市公園整備状況

(平成6年3月31日現在)

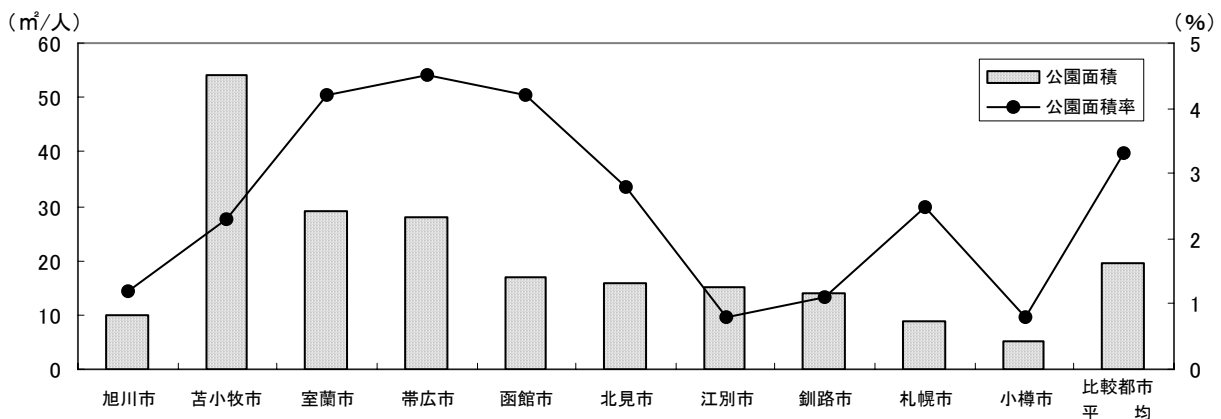
都市名	都市計画区域面積 (ha)	都市計画区域内 人口(千人)	公園箇所数 (ヶ所)	都市計画区域内 公園面積(ha)	一人当たり公園 面積(m ² /人)	公園面積率 (%)	人口千人当たり 都市公園の箇所数	1ヶ所当たり公園 面積(ha)	備 考
旭 川	30,050	352	286	365.28	10.37	1.2	0.8	1.3	
苫小牧	38,772	167	271	892.27	53.43	2.3	1.6	3.3	
室 蘭	7,640	112	101	317.45	28.34	4.2	0.9	3.1	
帯 広	10,210	164	141	453.95	27.68	4.4	0.9	3.2	
函 館	11,723	299	140	488.44	16.34	4.2	0.5	3.4	
北 見	5,973	106	99	163.89	15.46	2.7	0.9	1.7	
江 別	18,883	107	186	153.14	14.31	0.8	1.7	0.8	
釧 路	22,176	200	198	245.32	12.27	1.1	1.0	1.2	
札 幌	56,795	1,732	2,196	1,430.79	8.26	2.5	1.3	0.7	・札幌市には、国営公園として滝野すずらん丘陵公園がある
小 樽	12,956	163	81	87.88	5.39	10.7	0.5	1.1	
平均	—	—	—	—	19.17	3.3	1.0	2.0	

(※「北海道の都市公園」より作成する)

■道内主要都市の人口千人当たりの都市公園整備数と平均公園面積



■道内主要都市の一人当たりの都市公園面積と都市公園面積率



③全国類似都市と公園整備の比較

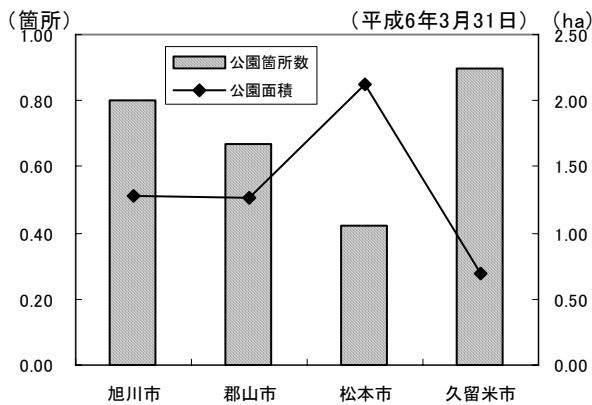
旭川市と立地環境の類似する都市を抽出して、公園整備の状況を比較してみました。比較都市は、人口規模、産業構造が類似し、且つ内陸部に位置し、県内の中核都市であること、さらに3大都市圏の影響を受けないものとし、福島県郡山市、長野県松本市、福岡県久留米市の3都市を抽出しました。これらの都市と比較すると、旭川市は、一人当たり公園面積や公園面積率は最も高く、また、人口1,000人当たり公園箇所数や公園1箇所当たりの面積は平均的です。

■全国類似都市の都市公園整備状況

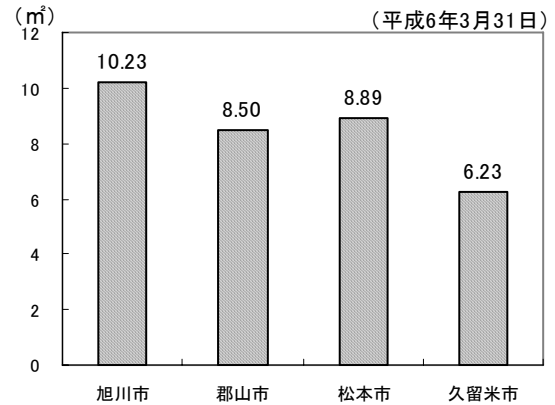
(平成6年3月31日現在)

都道府県名	市町村名	都市計画区域		都市公園		都市公園 の箇所数 (人口千人当たり)	1箇所当たり 公園面積 (ha)	1人当たり都市 公園面積 (m ²)	公園 面積率 (%)
		面積 (ha)	人口 (千人)	面積 (ha)	箇所数				
北海道	旭川市	30,050	357.0	365.28	286	0.80	1.28	10.23	1.2
福島県	郡山市	27,024	296.1	251.71	198	0.67	1.27	8.50	0.9
長野県	松本市	26,550	203.7	181.15	85	0.42	2.13	8.89	0.7
福岡県	久留米市	12,468	228.3	142.18	205	0.90	0.69	6.23	1.1

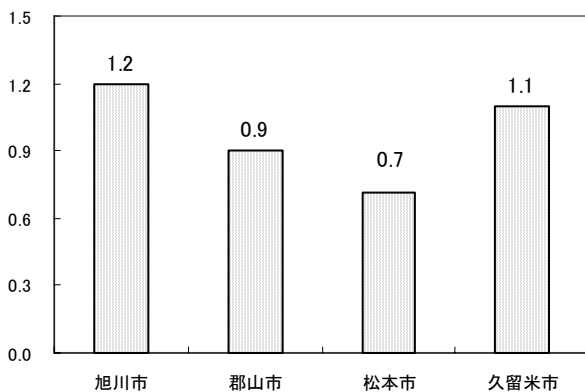
■全国類似都市の人口千人当たりの都市公園整備と平均公園面積



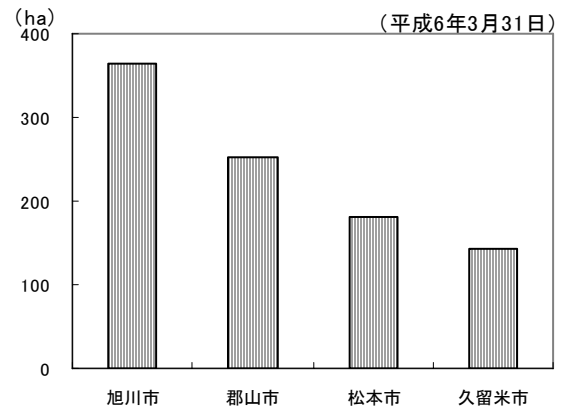
■全国類似都市の一人当たりの都市公園面積



■全国類似都市の平均公園面積



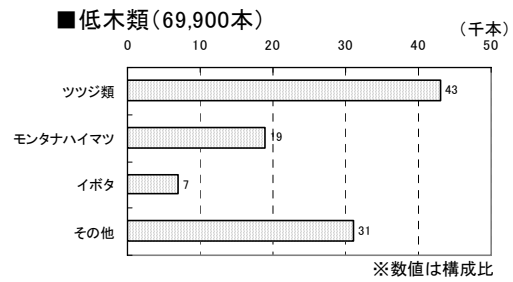
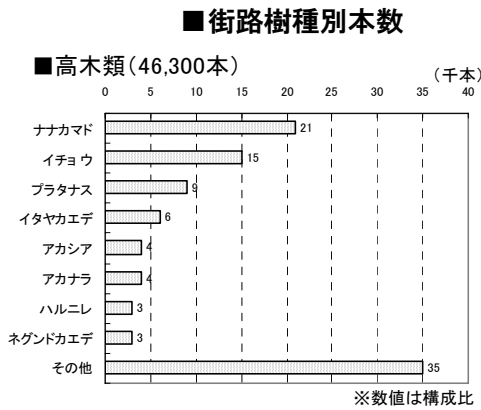
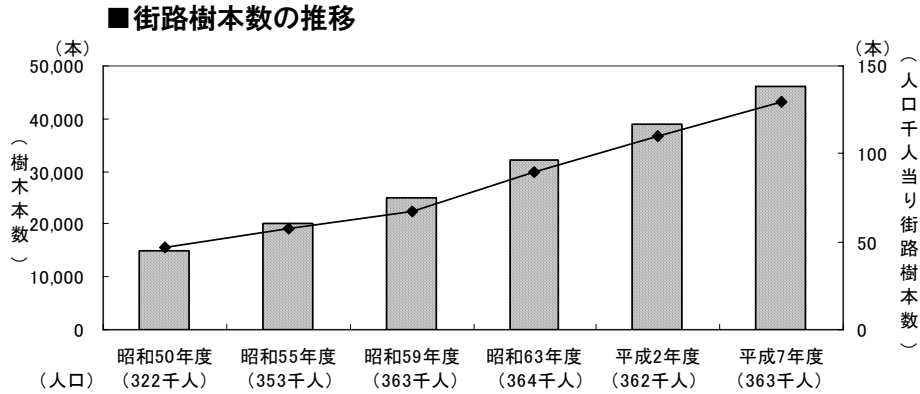
■全国類似都市の都市公園の総面積



(5)道路の緑

旭川市の街路樹は年々整備量を増やし、平成7年度(1995年)現在で約46、300本となっており、人口1、000人当たりの街路樹木数は127.5本となっています。

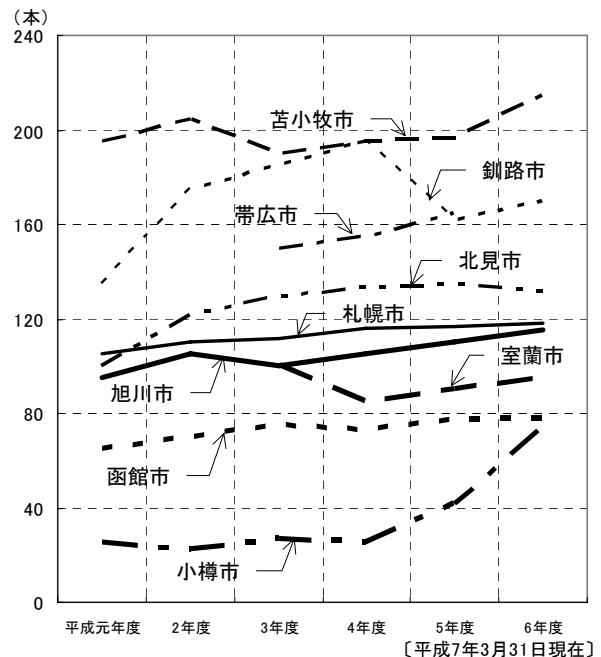
道路植栽は中心部(新旭川・中央・神楽)で多く、周辺部では少ない傾向を示しています。



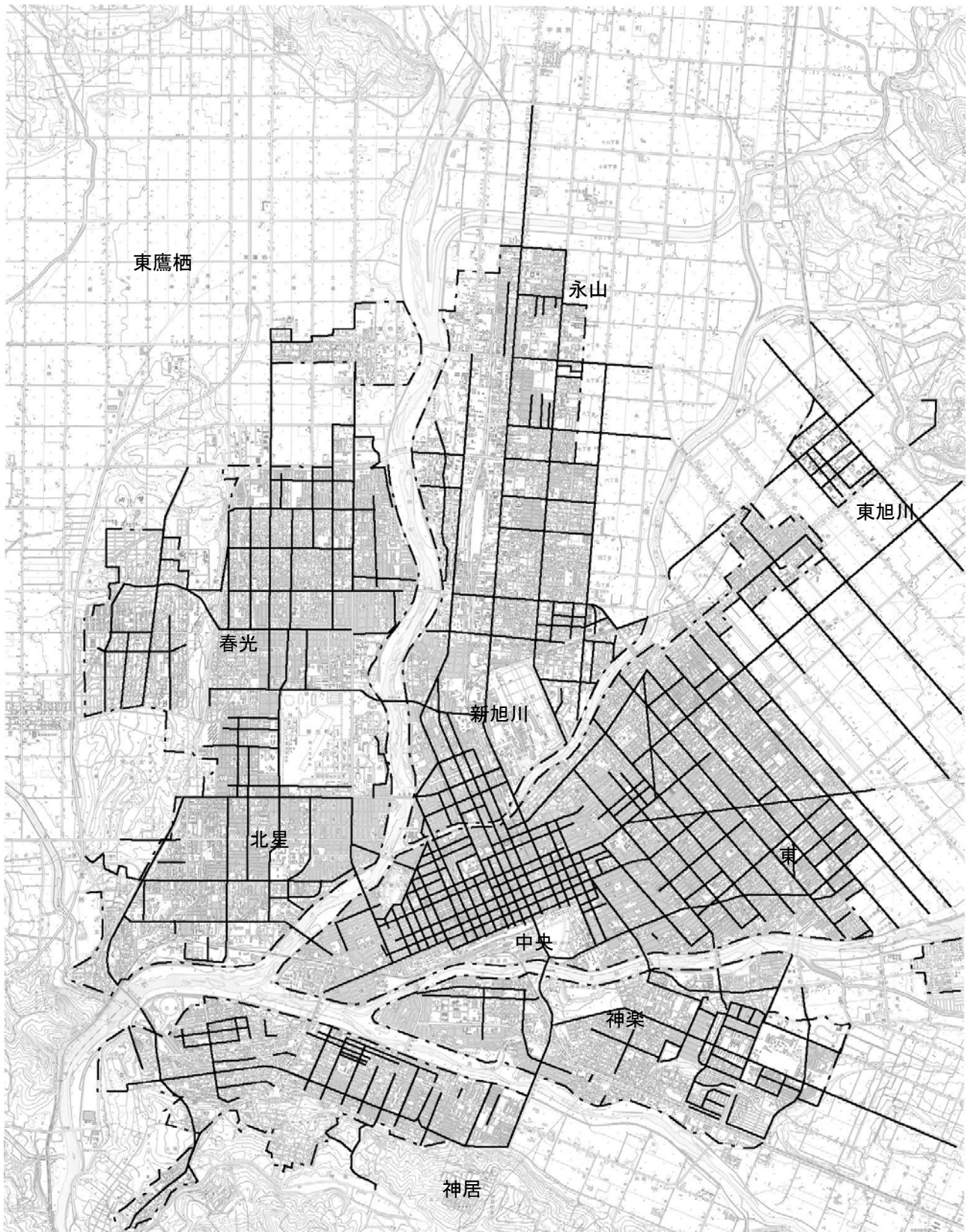
旭川市の街路樹本数を道内主要都市と比較すると、比較都市中第6位という結果になっています。

旭川の街路樹を概観すると、神楽岡通(プラタナス)のように大きく美しい樹冠を持つ並木となっている箇所も一部に見られますが、信号機や電線などと競合するため強めの剪定を必要とし、緑量感に欠けるものとなっています。

■道内主要都市の人口千人当たりの街路樹本数推移



■街路樹整備位置図

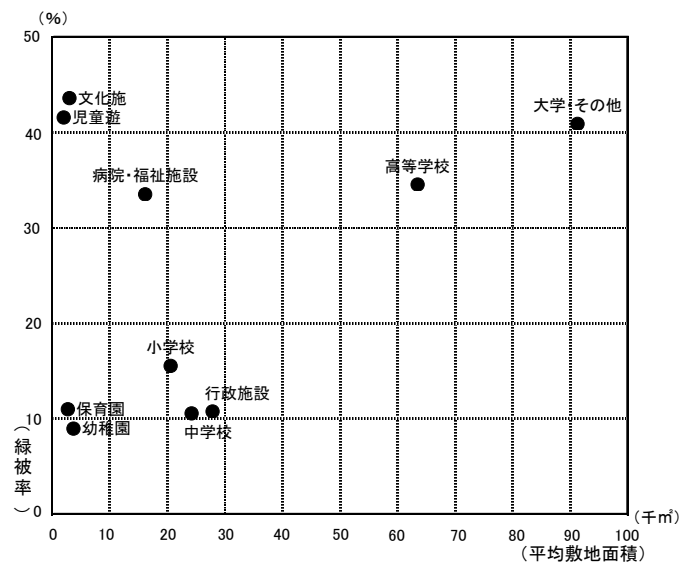


(6) 公共施設の緑

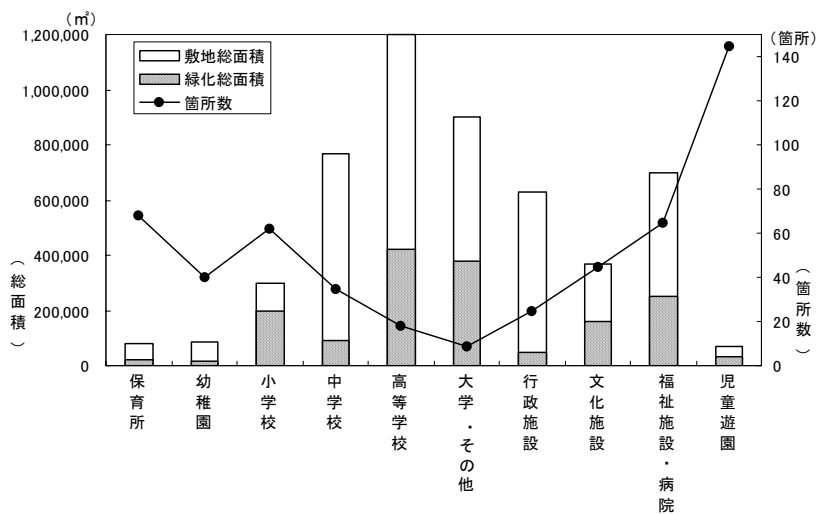
旭川の公共施設の緑化状況は、文化施設、高等学校以上の教育施設は緑被率30%以上で比較的高水準にあるものの、小・中学校、保育園、行政施設は20%以下の緑被率に止まっています。また、保育園や幼稚園は、どの施設も敷地面積が狭小で十分な緑化スペースを確保することが困難な状況下であり、比較的敷地に余裕のある小・中学校も、十分な緑地を有していない現状が伺えます。

緑被率が低い状況下にあるこれらの保育園・幼稚園・小学校等は、敷地面積は狭小であっても市域全体に点在し、その箇所数は最も多いことから、地区の緑化に果たす役割は大きく、子供たちの緑化意識の醸成・啓発という観点からも積極的な緑化が望まれます。

■ 公共施設の敷地面積と緑被率



■ 施設分類別緑化状況



(7)民有地の緑

旭川市の民有地における緑被面積は約500haで、緑被率約17%となっています。

また、市街地における民有地の緑を見ると、地域に散在する社寺林や屋敷林など存在価値の高い樹林地も多く見られ、地域の環境形成に大きく寄与しています。本市の民有地の緑の現状は以下の通りに概観することができます。

①住宅地

- ・住宅地は、戸建住宅地と集合住宅地に区分できます。戸建住宅の緑化状況は、個々の住宅地によって差が大きく、また、一戸の敷地面積も狭く、十分な緑化スペースが確保されていない状況下にあります。緑地の余地が十分に確保できない住宅地では、草花を利用して明るく美しい雰囲気演出を行っている家庭も見られ、街並み景観の向上に役立っています。
- ・集合住宅の緑化スペースは、戸建住宅に比べて広い場所が確保しやすく、都市緑地が整備されている例もあり、団地の敷地内の緑被率も比較的高いレベルにあります。
- ・しかし、集合住宅の緑は草地が多いといった印象があり、緑視的には不足感があります。

②商業地・工業地

- ・旭川市の商業地はJR駅周辺や主要幹線道路沿線に形成されています。
- ・商業空間の緑は、街路樹に負うところが大きく、商店街の緑化運動の取り組みは不十分と言えます。
- ・工業地の多くは、市街地周辺部に位置していますが、なかでも新旭川地域の日本製紙旭川工場は木材産業のまち旭川をイメージするにふさわしい緑地帯を有しています。
- ・しかしながら、大部分の工業地では住宅地との緩衝が不十分です。

(1)市民アンケートに見る緑の傾向

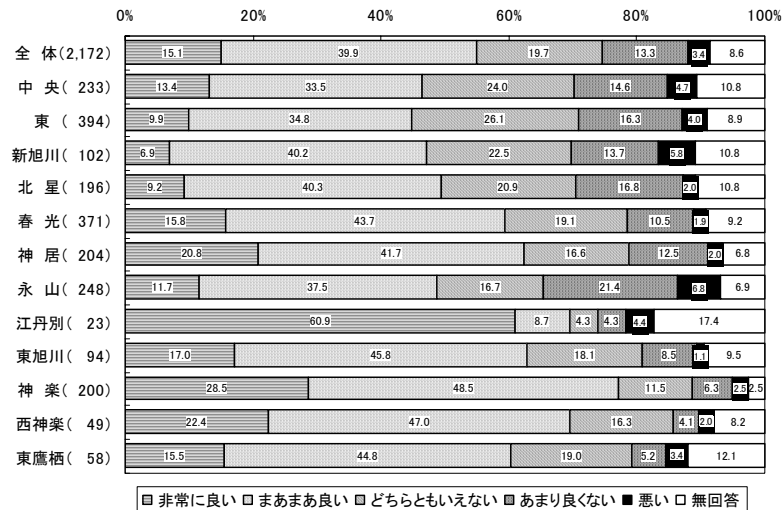
〔平成7年度(1995年)旭川市民アンケート調査より〕

旭川市民の「緑などの自然環境」「公園、遊び場」についての意識調査の結果を地区毎に見ると以下の通りに要約されます。

①緑などの自然環境

これは、比較的高い評価を得ており、特に、江丹別、東旭川、西神楽の郊外地区、また、神楽での評価が高く6～8割近くの人が「良い」と感じています。なかでも江丹別では、「非常に良い」との評価が6割にも及んでおり、緑などの自然豊かな環境であると感じている人が多いことがわかります。

■緑など自然環境の印象



■緑など自然環境の印象の推移

(単位:%)

一方、中央、東、新旭川、北星、永山といった市中心部や住宅地区においては、評価が低い傾向にあり、周辺にある豊かな自然を市街地まで呼び込めていない状況が伺えます。

また、前回調査(平成3年度)との比較において評価を落としています。これは、緑などの自然環境は、潤いのある生活にはかけがえのない要素であり、自然を身近に感じていたいとの市民の意向が、より強くなった結果と推測されます。

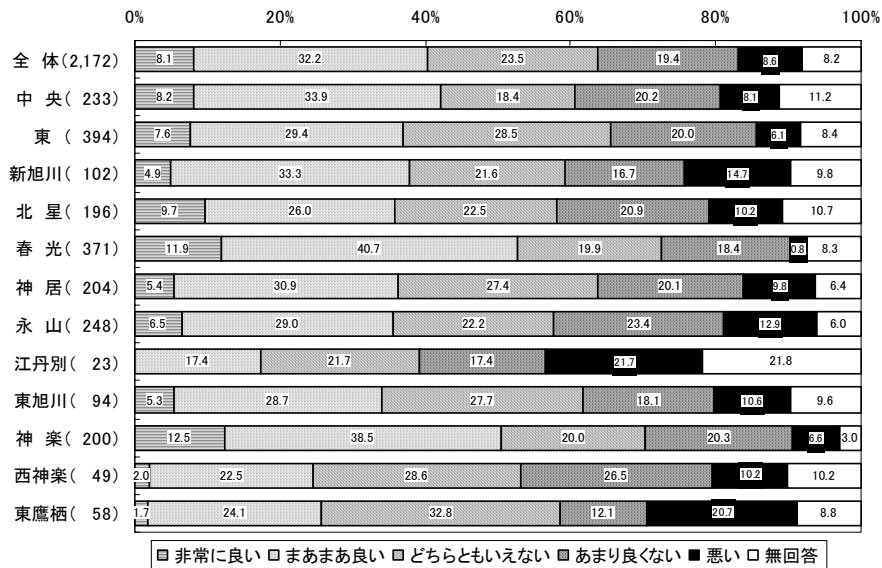
	良い	どちらともいえない	悪い	無回答
全体	55.0	19.7	16.7	8.6
中央	68.3	11.7	14.5	5.4
東	46.9	24.0	19.3	10.8
新旭川	61.7	13.9	17.9	6.4
北星	44.7	26.1	20.3	8.9
春光	61.5	16.6	16.6	5.3
神居	47.1	22.5	9.6	10.8
永山	67.4	16.8	13.9	3.0
江丹別	49.5	20.9	18.8	10.8
東旭川	70.0	13.5	10.9	5.7
神楽	59.3	19.1	12.4	9.2
西神楽	71.0	11.1	13.3	4.6
東鷹栖	62.3	16.6	14.3	6.8
全体	71.4	11.0	10.5	7.1
中央	48.2	15.7	28.2	6.9
東	63.6	7.5	28.2	5.7
新旭川	69.6	4.3	8.7	17.4
北星	90.0	0.0	5.0	5.0
春光	62.8	18.1	9.6	9.5
神居	72.4	11.5	10.4	5.7
永山	77.0	11.5	9.0	2.5
江丹別	80.0	6.0	10.0	4.0
東旭川	89.4	6.3	6.1	8.2
神楽	73.3	6.7	13.3	6.7
西神楽	60.3	9.0	8.6	12.1
東鷹栖	71.1	8.9	16.6	4.4

②公園、遊び場の整備状況

先にみた「緑などの自然環境」とも密接な関係が見られる項目であり、神楽、春光においては「緑などの自然環境」と同様に高い評価となっていますが、東、新旭川、北星、永山などにおいては評価が低くなっています。

また、江丹別、東旭川、西神楽は、「緑などの自然環境」に対する評価は高くなっていますが、「公園、遊び場の整備状況」については評価が低くなっており、地区毎の状況によって、求められる環境の質が異なっていることがわかります。

■公園遊び場の整備状況の印象



■公園遊び場の整備状況の印象の推移

(単位: %)

前回調査(平成3年度)と比べると、全体としては「悪い」との評価は減少しており、地区別に見ると、春光、東鷹栖では「悪い」との評価が減少し、「良い」という評価がわずかながら増加しています。

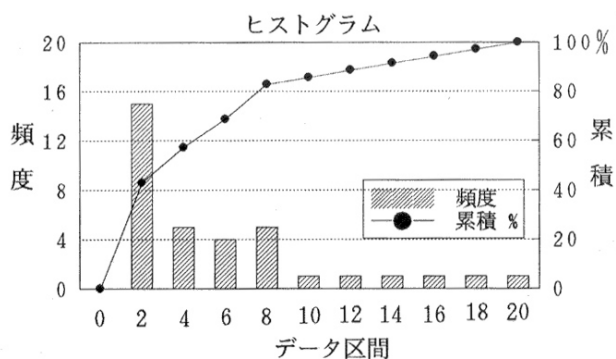
	良い	どちらともいえない	悪い	無回答
全体	40.3	23.5	28.0	8.2
中央	45.3	17.3	32.1	5.4
東	42.0	18.4	28.3	11.2
新旭川	49.0	17.9	26.3	6.8
北星	37.0	28.5	26.1	8.4
春光	41.3	20.3	32.6	5.8
神居	38.2	21.6	30.4	9.9
永山	57.4	13.9	26.7	2.0
江丹別	35.7	22.5	31.1	10.7
東旭川	47.7	17.1	30.1	5.2
神楽	52.6	10.9	19.2	9.3
西神楽	47.9	17.3	29.8	4.9
東鷹栖	36.3	27.4	28.9	6.4
全体	39.5	13.8	39.0	7.6
中央	35.5	22.2	36.3	6.0
東	43.0	14.9	36.4	5.7
新旭川	17.4	21.7	39.1	21.8
北星	30.0	35.0	30.0	5.0
春光	34.0	27.7	28.7	8.6
神居	40.2	18.4	37.9	3.4
永山	51.0	20.0	26.0	3.0
江丹別	52.0	11.5	32.5	4.0
東旭川	24.5	28.6	36.7	10.2
神楽	42.2	31.1	20.0	6.7
西神楽	25.8	32.8	32.8	8.6
東鷹栖	24.4	26.7	44.5	4.4

(2) 樹林地の状況

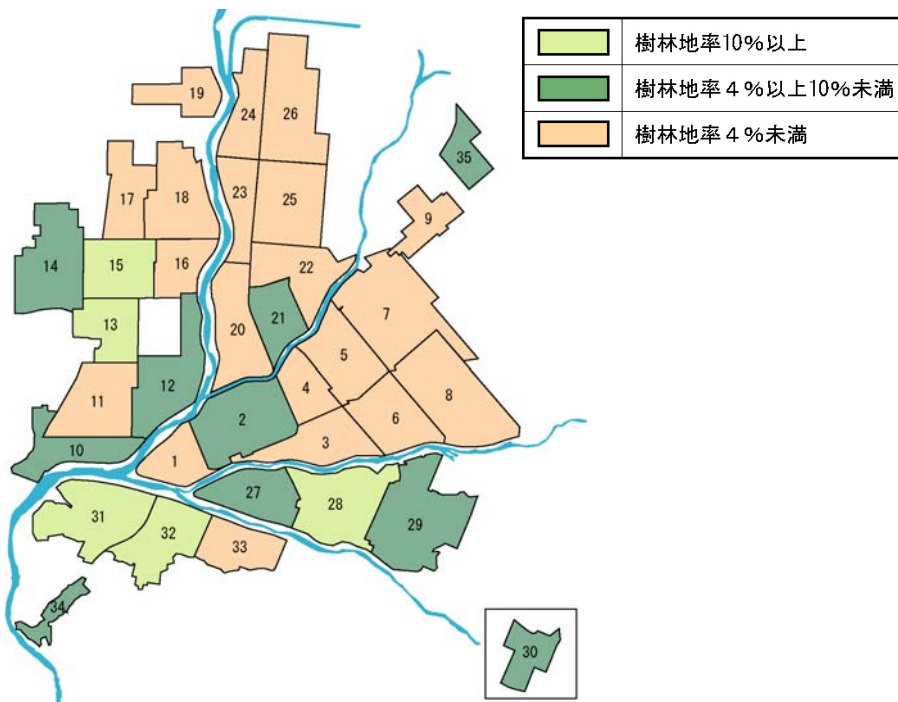
- ・緑被率や緑視を考える上で最も重要となる樹林地率を地区毎に分類し、35に分かれた地区の樹林地の状況を2%ごとの出現頻度図としてまとめました。
- ・これによると、市街地を構成する35地区の内、樹林地率4%未満の地区が20地区で60%近くに及び、8%未満の地区を加えると80%以上にもなることがわかります。

■ 樹林地率ランク別出現頻度図

樹林地率		
データ区間	頻度	累積 %
0	0	.00%
2	15	42.86%
4	5	57.14%
6	4	68.57%
8	5	82.86%
10	1	85.71%
12	1	88.57%
14	1	91.43%
16	1	94.29%
18	1	97.14%
20	1	100.00%
次の級	0	100.00%



■ 地区別樹林地率の状況



■ 状況のまとめ

- ・緑の意識に関する諸調査によると、緑に対する充足意識が高まる樹林地率は、最低でも10%~15%以上に入ってからと言われていることから、市街地の樹林地の状況は相当低いものと捉えることができます。

(3)緑被感覚の分析

旭川市の市街地は、河川と丘陵地の緑によって骨格が形成され、実際に市街地の中で緑の状況を見ると、それらの骨格的な緑を除くとまとまった緑被が得られていません。

市街地における緑被は、公園緑地や民有地の緑によるところが大きく、そこで、実際に緑被がどのような状況になっているかを樹林地率と公園緑地の密度を調べて35地区の分散状況を見てみました。この際、全市の平均値を境に4つの象限をつくり、各地区4つのグループに分けて、それぞれの特性を見てみました。AからDは上から順に緑被を悪く感じていく感覚をあらわしています。

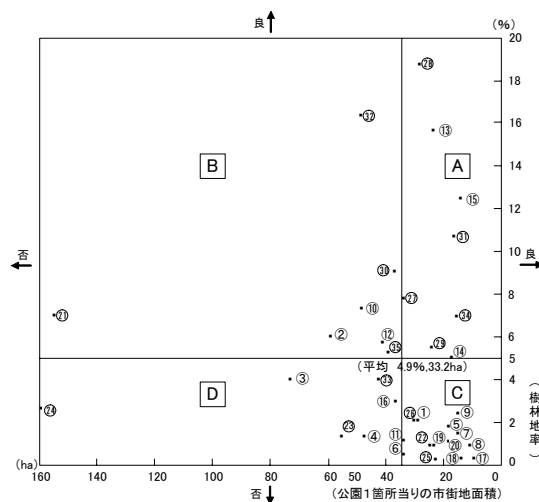
A象限(Aグループ)：樹林地率も公園の密度も高い緑被感覚の良いグループ

B象限(Bグループ)：樹林地率は高いが公園緑地の密度が低いグループ

C象限(Cグループ)：公園密度は高いが樹林地率が低いグループ

D象限(Dグループ)：樹林地率、公園密度ともに低いグループ

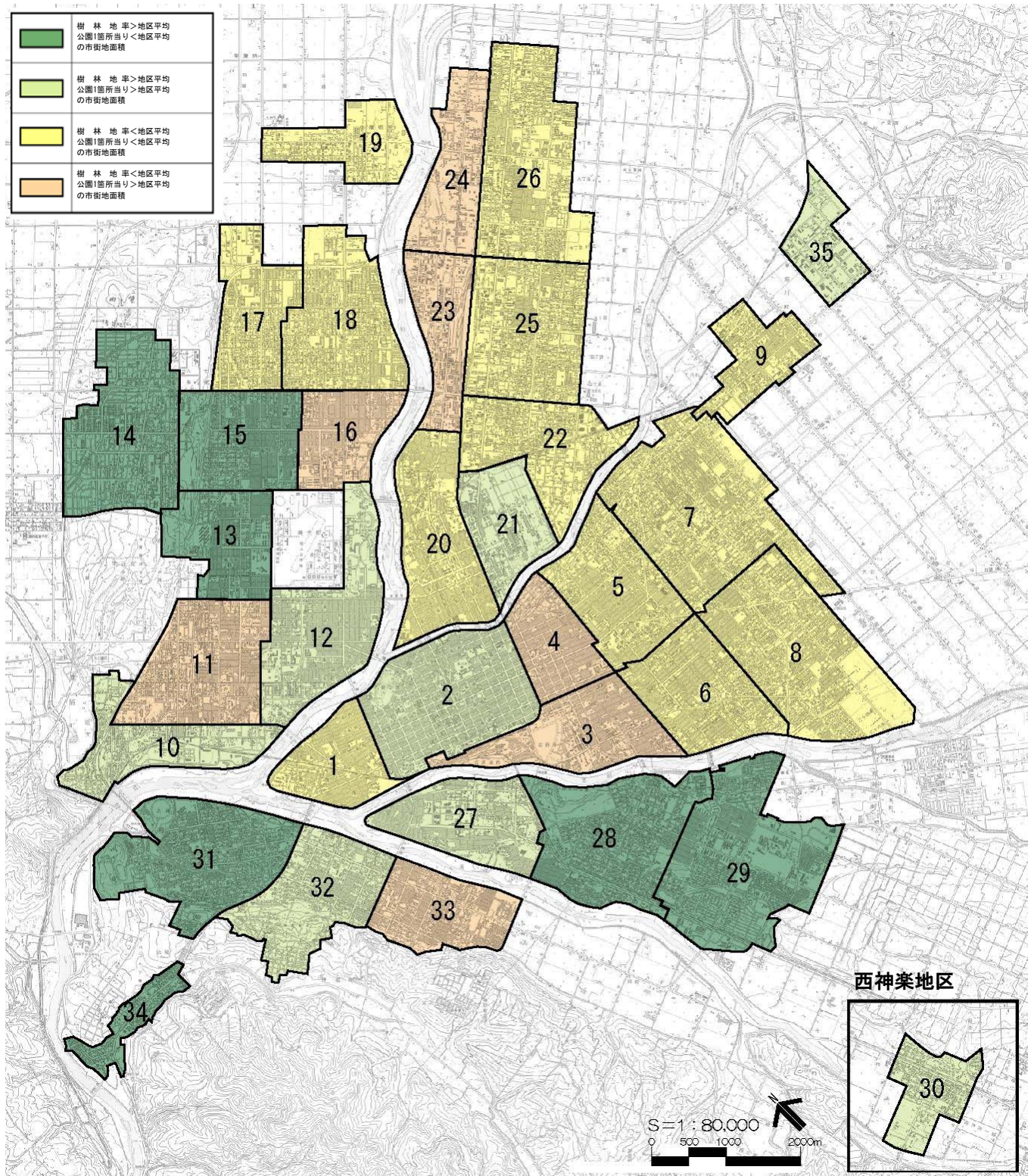
■緑被感覚グラフ



■状況のまとめ

- ・丘陵地や屋敷林などが見られる地区の緑被感覚が良いことが分かります。
- ・都心やその周辺の市街地は、社寺林や古くからの樹林が残されており、それらに依存した緑被となっています。
- ・新興住宅地など新しく開発された付近は、公園緑地は整備されているものの、樹林地が少なく、まとまった緑被の得にくい地帯となっています。
- ・スプロール的な拡張を見せた高度成長期前後の市街地や流通業務を主体とする地区では、公園緑地も樹林地も少なく、緑被状況が良くない地帯となっています。
- ・全体として西側に偏った緑被密度が見られますが、この付近は、公園緑地の整備水準が低く、民有地や公共施設、社寺林など昔からの緑に依存しています。
- ・東側は、公園緑地の整備水準が高いものの、大規模な公園やまとまった樹林地が少なく、視覚的にも背景となる緑が極端に不足しています。
- ・ちょうど扇状の、河川の流れが狭まるにつれて、緑被が稀薄になっていく状況が見られます。

■地区別緑被感覚図



(4)街路樹や公園緑地の整備特性

街路樹や公園緑地は、公的に担保される市街地の重要な緑です。この大きな2つの緑の要素がどのような状況で整備されているのかを明らかにするために、市街地を35に区分した地区ごとに街路樹の植栽延長、公園の道路への接道状況を調べ、その分散状況を見ました。

それによると公園・街路樹の整備水準により、大きく5つのグループに分かれていることが分かりました。

Aグループ特性：公園緑地、街路樹共にバランス良く整備されているグループ

対象地区：計画的な街路植栽と公園整備が行われた緑が丘(29地区)と日の出(35地区)の2か所が抽出されます。

Bグループ特性：とくに街路樹整備に偏った整備が行われているグループ

対象地区：都心及びその隣接地(2、4地区)などの昔から街路整備に取り組んできたり、現在街路整備を積極的に進めている地区が抽出されます。

Cグループ特性：公園緑地の整備に偏った環境整備が見られるグループ

対象地区：丘陵地に接する比較的新しい住宅地が抽出されます。

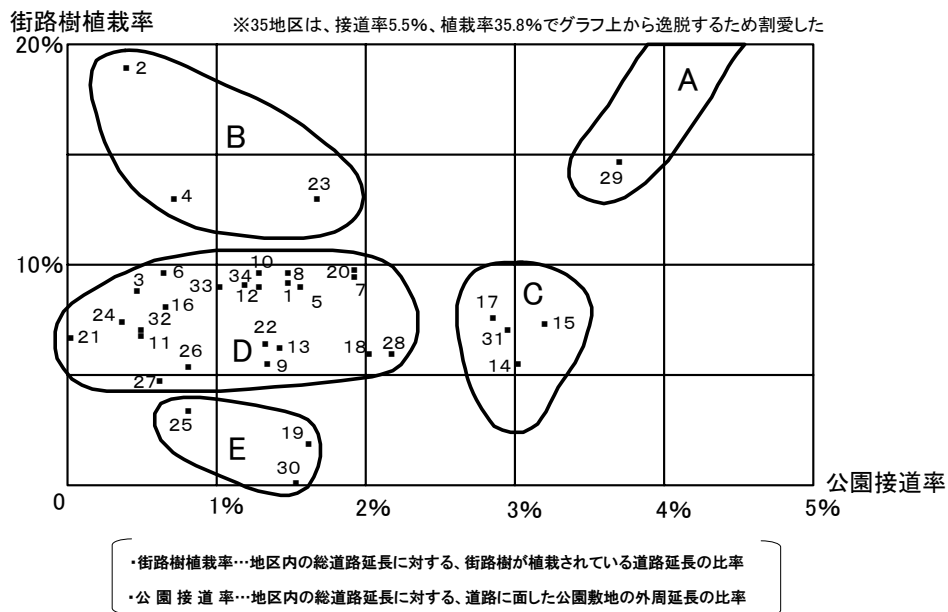
Dグループ特性：大部分の地区が属する平均的で多少街路樹整備率が良いグループ

対象地区：古くからの住宅地など都心を中心に巻き取り大部分の地区が含まれます。

Eグループ特性：公園緑地整備、街路樹整備ともに整備が遅れているグループ

対象地区：都心より遠隔地の飛び地的市街地などまとまった開発が行われなかった地区が抽出されます。

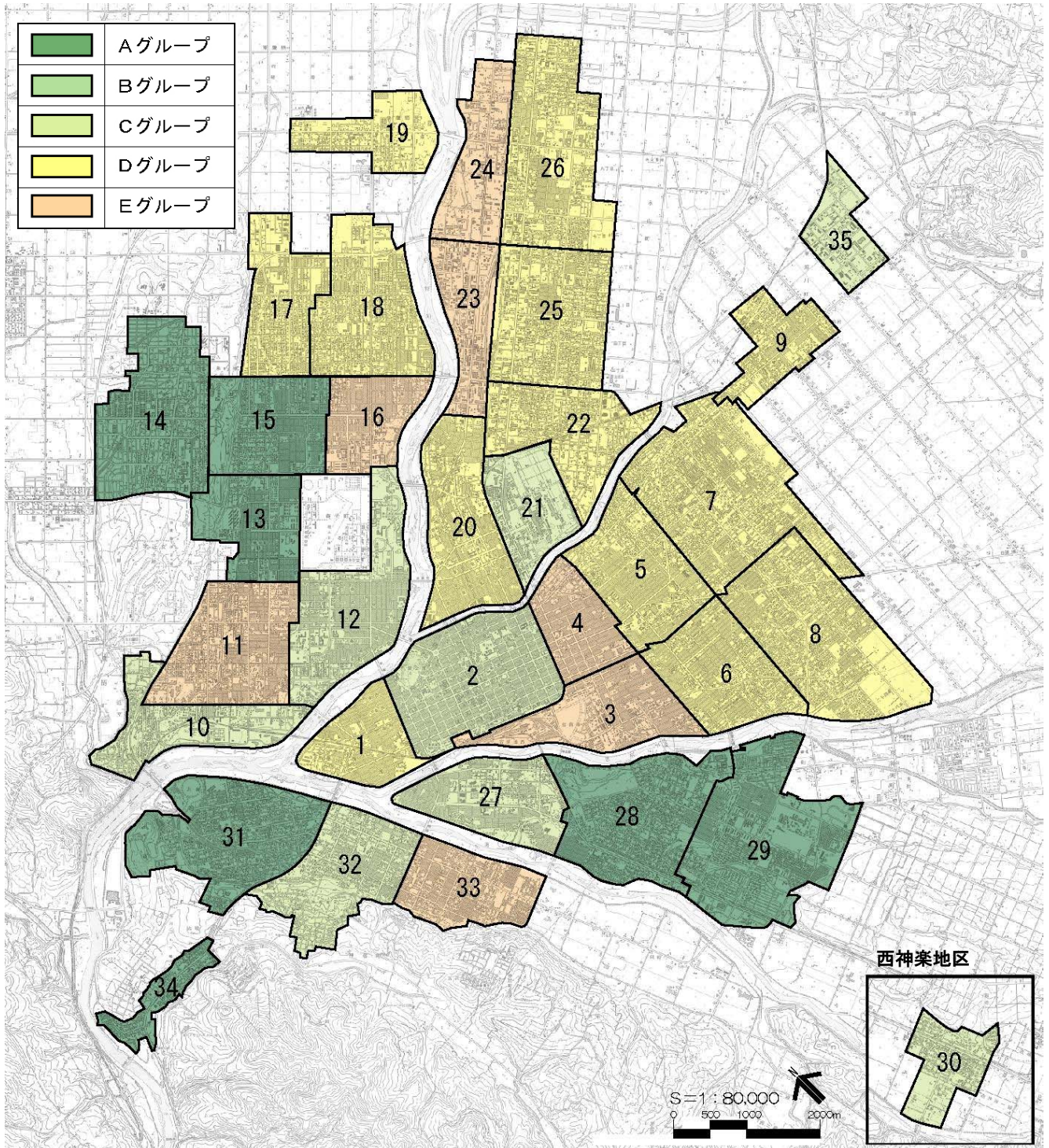
■街路樹及び公園の地区別整備特性グラフ



■状況のまとめ

- ・都心部付近に街路樹を主体とする整備が進み、丘陵地周辺の新興住宅地が公園緑地を主体とする整備が行われています。
- ・特に都心部外郭の市街地の公園緑地の整備が遅れています。

■街路樹及び公園の地区別整備特性図



(5) 緑視構造の分析

緑を目にする主な場所が道路である場合、公園と街路樹がどのくらい接しているか、また、樹林地はどのくらいあるのかが緑視(見える緑の量)に大きな影響を及ぼすと考えられます。

このことから、街路樹の延長と公園緑地の道路への接道率、樹林地率を用いて、35に分かれた地区ごとに、その分散状況をグラフ化してみました。それによると、市街地の緑視は、大きく4つのグループに分かれていることが分かりました。

Aグループ特性：接道率、樹林地率ともに比較的バランスがよく、公園や街路樹、樹林地それぞれが緑視を高めているグループ

対象地区：丘陵地に接し、周辺にまとまった樹林を有する地区と街路樹や公園緑地が集中的に整備された地区

Bグループ特性：接道率は平均的だが樹林地率が高く、樹林地に偏った緑視を有するグループ

対象地区：丘陵地に接し、屋敷林などの樹林地に恵まれた地区

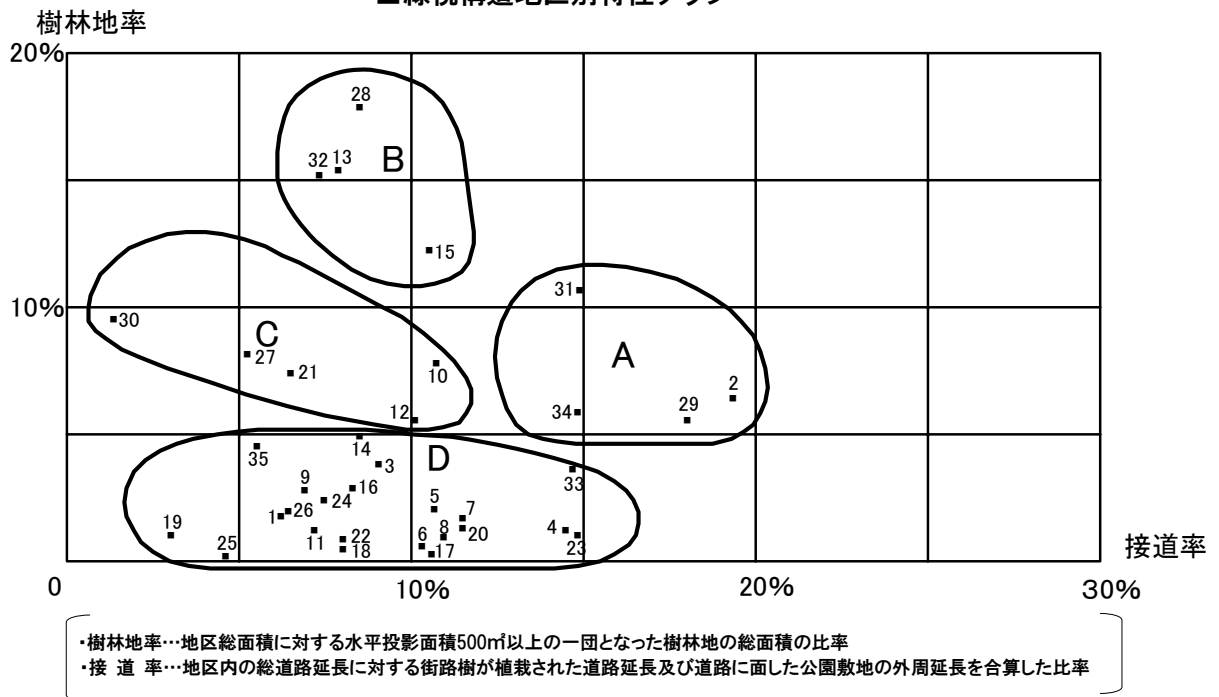
Cグループ特性：平均的な樹林地率で公園緑地の整備にばらつきが見られるグループ

対象地区：都心周辺に位置し旧市街や古くからの工場などに樹林地が残る地区

Dグループ特性：公園や街路樹に偏った緑視を有するグループ及び、接道率、樹林地率ともに低く緑視が得にくいグループ

対象地区：主に平地部や新しく開発された地区

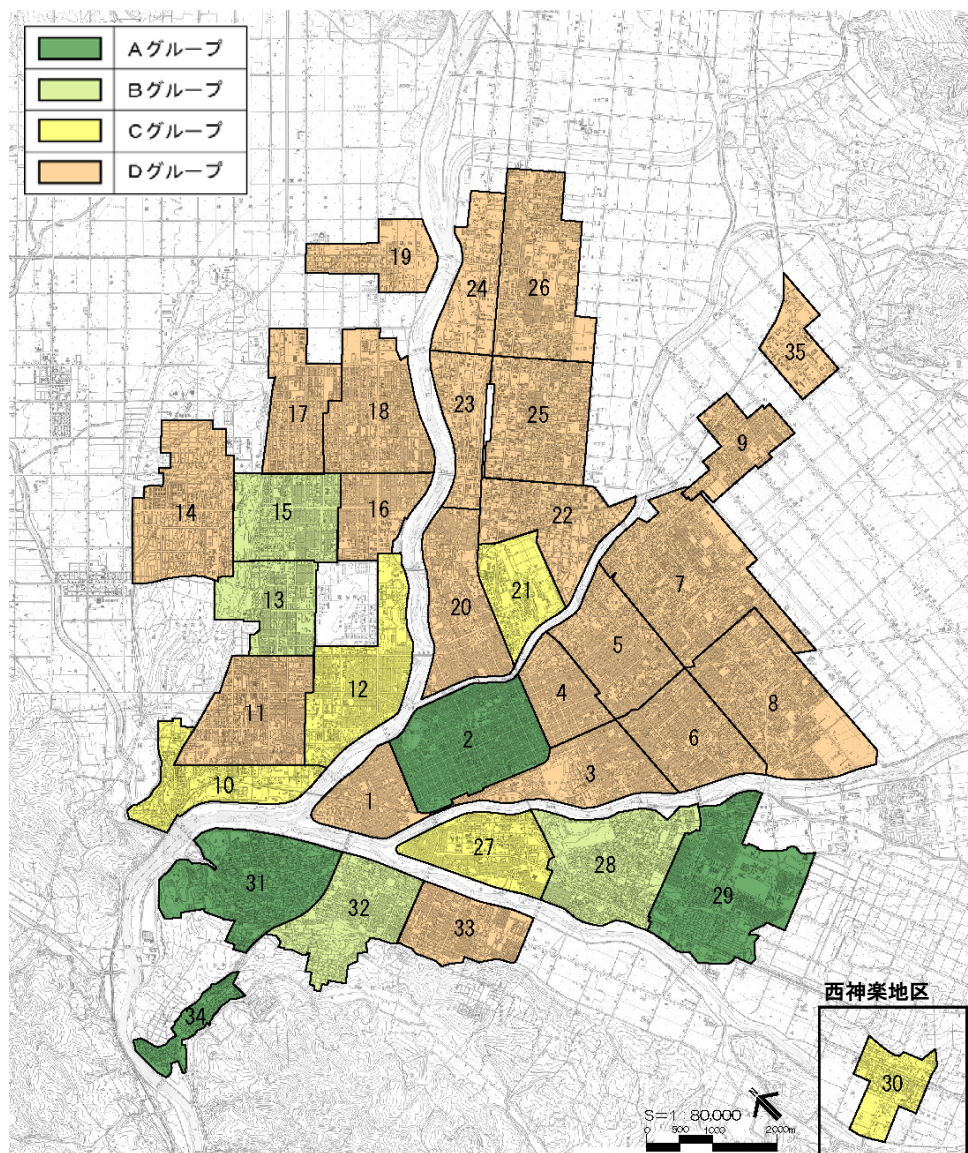
■ 緑視構造地区別特性グラフ



■状況のまとめ

- ・例えば緑が丘(29地区)と都心(2地区)は、実際に目にする緑視の状況が著しく異なりますが、同じグループに属していることから、潜在的には、優れた緑視を得られる可能性を秘めていると考えられます。
- ・おおよそ都心及び都心に近い比較的開発の早かった近文(10地区)、大町・川端(12地区)、パルプ(21地区)、神楽(27地区)がまとまった樹林を残しており、これらの保全が重要と考えられます。
- ・緑のボリュームによって緑視の感覚が大きく変化するのは当然ですから、樹木管理や緑に関する共通認識を育成することが重要と考えられます。
- ・新興住宅地などでは、適切に公園配置が進められているにも関わらず、緑視が得にくいのは、個々の公園の緑の量が少なかったり、公園が幹線道路から見えにくかったりすることやもともとが農地で樹林が少なかったためと考えられ、わずかな樹林地を大切にする必要があります。

■緑視構造地区別特性図



(6) 緑の分析のまとめ

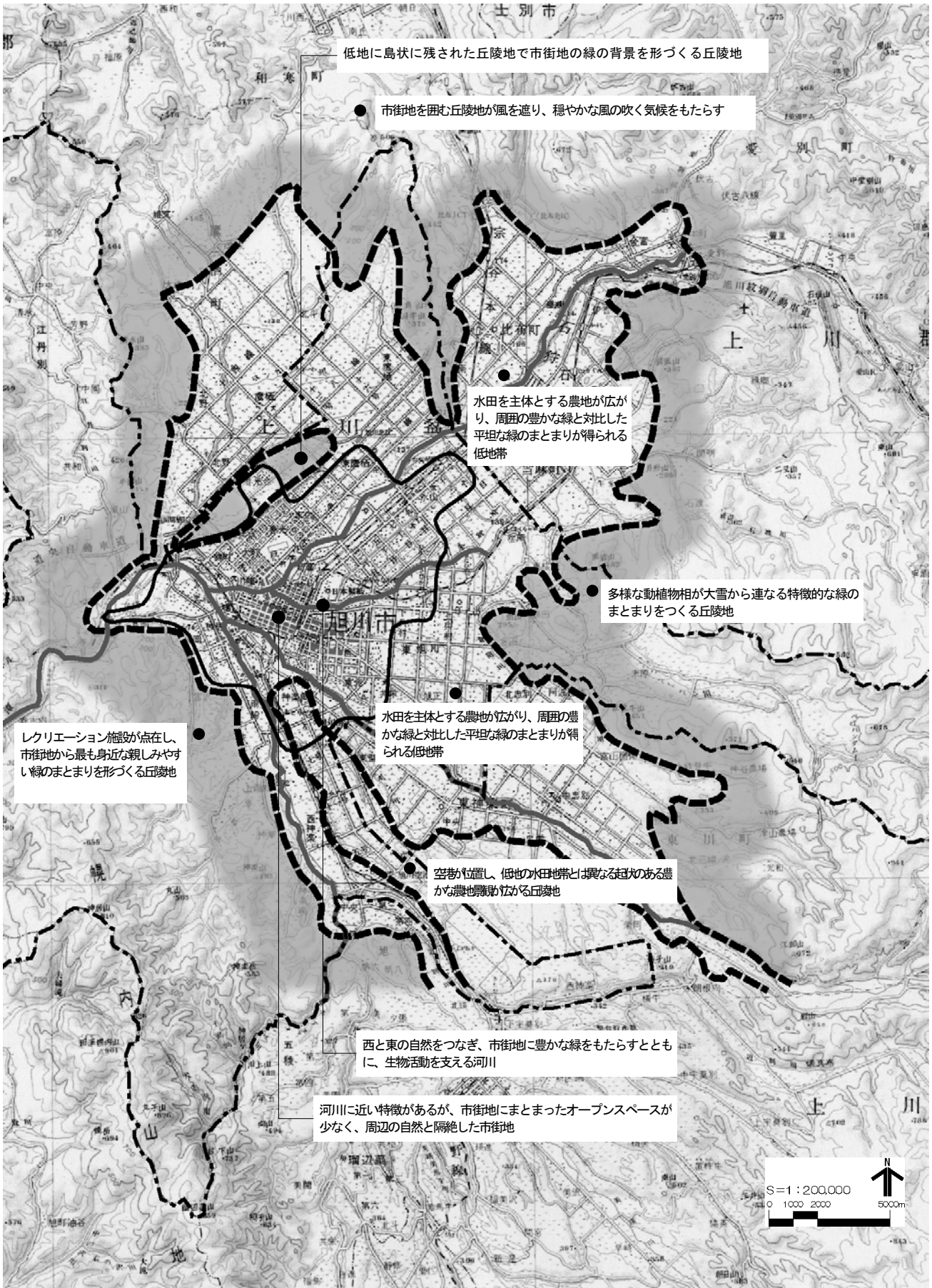
① 広域の緑の特性

- ・ 旭川市の緑は、周辺丘陵地に負うところが大きく、緑量の少ない市街地景観の背景として、重要な役割を果たしています。
- ・ 都市計画区域内の農地は、豊かで美しい農村景観を呈し、都市生活者にうるおいをもたらす重要な緑地帯となっています。
- ・ 市街地を取り囲む丘陵地及び河川空間は、多様な動植物の生息する重要な自然となっています。
- ・ このような恵まれた自然環境と相反して、市街地では、まとまった緑地が少なく、周辺の自然と隔絶した印象を受けます。

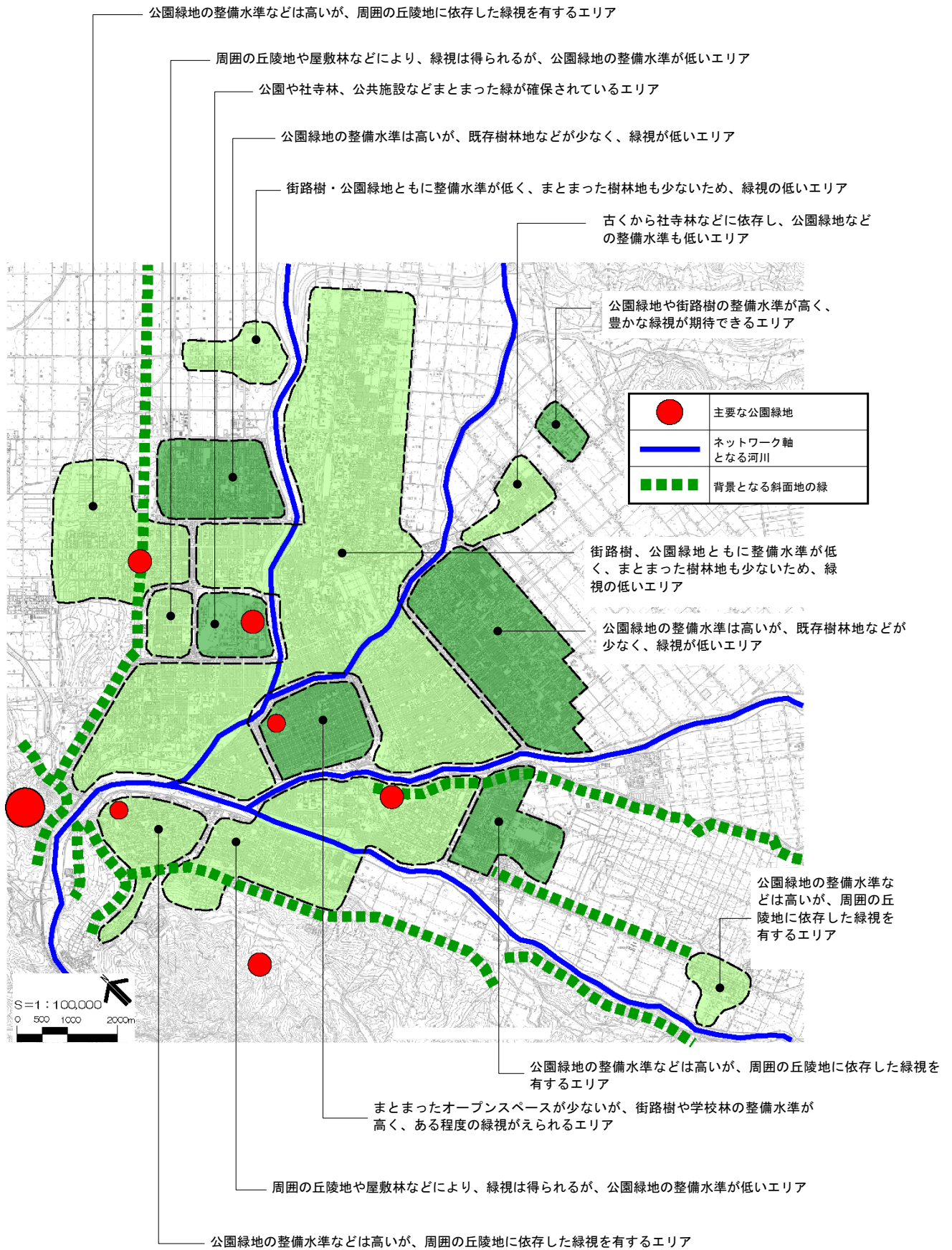
② 市街化区域の緑の特性

- ・ 地区ごとに緑量の格差が大きくなっています。
- ・ 周辺の丘陵地や市街地に残る社寺林などに依存した緑視を有しています。
- ・ 全体として公園緑地などのまとまったオープンスペースや樹林地が不足しています。
- ・ 公園緑地の整備に偏りが見られ、東側にきめ細かく公園整備がなされています。また、西側は公園の整備数は少ないですが大規模な公園緑地が配置されています。
- ・ 東側の緑視は、農地や草地などの平面的な緑によって形成される場所が多く、樹林の占める割合が低くなっています。

■ 広域の緑の特性総括図



■市街化区域の緑の特性総括図



これまでの10年間の旭川市の緑の変遷は、次のようにまとめられます。

- ・市街化区域の緑被率は、市街化区域の拡大にともなってわずかに減少しています。
- ・樹林率は、西高東低の傾向が見られ、特に春光、緑ヶ丘、忠和方面が高い状況となっています。
- ・緑被は、都心西地区、春光、春光台方面の増加が顕著である一方で、宮前、神楽、西神楽、永山方面の減少が著しい状況にあります。
- ・樹林率は、都心西地区、春光、春光台方面、永山方面が増加傾向にあるものの、環状1号線沿線の東部方面や宮前、神楽、永山地区の減少が著しくなっています。
- ・中心部およびその周辺の緑被および樹林の減少が続いており、西部方面は、増加傾向にあるものの、東部方面の緑被および樹林の減少が著しく、市街地全体では、ほぼ横ばいの状況にあると言えます。

※樹林率

土地を被う樹林の面積率のこと。今回の緑被現況調査では、平成17年(2005年)8月撮影の航空写真を用い、概ね25㎡以上の緑被地を抽出し、面積を計測した。平成7年度(1995年度)の緑被現況調査では、概ね500㎡以上の緑被地を航空写真から判読し、計測しているため、樹林率の変遷を分析するため、今回調査データについても500㎡以上の樹林地データの結果を用いた。

※緑被

緑被は、土地を被う樹林、草地、田畑、水辺を指すもので、緑被率は、その緑被が土地を被う面積率のこと。

■樹林率変遷図(1995年値～2005年値)

